

四川省に来て、五日目(10月23日)の朝を迎えた。山小屋風の竹園酒店の朝食は麺であった。まだ10月下旬というのに、標高があるからか朝晩はかなり冷え込み暖房なしではいられなかったので、熱い麺は体を温めてくれありがたかった。

竹海は、「海」という名前が付くだけあって面積は広大でいくつもの観光ルートがある。どのコースにすべきか分からないのでホテルに聞くと、すぐ近くに「仙女湖」と書いてある扁額の掛かった入口があるので、そこから歩いて仙女湖から仙寓洞を廻るコースを勧められた。言われた門から入ると、すぐ両側に鬱蒼とした竹林が出迎えてくれる。そのうち敷石が赤褐色の散歩道がどこまでも続く。周囲の竹林とのコントラストが素晴らしい。左右を見ても上方を仰いでも竹ばかりである。今まで各地を旅したがこのような観光地はまだ見たことがない。竹海の名に恥じぬ光景だ。まさに海の形容がピッタリである。

10分余り歩いて行くと仙女湖が見えてきた。結構大きな湖の奥まったところに銀色の横座りした仙女のモニュメントが望まれる。竹取物語のような仙女の言い伝えがありそうだが教えてくれそうな人は周囲にはいない。湖のほとりに着くと竹で組んだ筏が置かれている。そこから対岸までロープが張ってあり、この筏に乗った女性がロープを手繰り寄せながらゆっくり筏を進めていく。ものの数分で対岸に着き、そこからまた歩き始めた。これだけ竹がありながらパンダは生息していないらしい。パンダの好む竹と種類が違うのかもしれない。そのうち彫刻された赤褐色の岩が続く仙寓洞に着いた。お釈迦様の涅槃像もある。滝がそこそこに流れ落ちており、アップダウンはあるが空気は新鮮で散歩コースにはもってこいのルートである。お店もなく商業化されていないのもよい。約2時間の行程でホテルの近くに戻ってきた。どこを見ても竹・竹・竹なので竹に酔ったような気分になった。

今日は、成都まで戻り初日(19日)に泊まったホ

テル「成都城市理想酒店」に行くことになっている。午後1時10分に、竹園酒店そばのバス停から宜賓行きのバスに乗り込んだ。半日ではあったが竹林の風景はとても名残惜しい。右に左に竹藪を見てパンダでも出てこないかな、と思っているうちに1時間半くらい経ってようやく宜賓に到着。バスの停まったところは、停留所の表示は無かったが、止まったところにもう1台のバスが待機しておりそれに乗り換える。うまく接続するものだ。友人が言うには、このバスは高速道路を走るがそれでも約4時間かかるとのこと。地図で見ればほんの数センチだが、宜賓から成都までは約300キロの距離がある。

夕方7時頃、成都市内のとある場所にバスは停まった。停留所の標識は無かったが何人か荷物を持って下りている。友人が我々もここで下りると言うので続いて下りた。運転手が「ここで下りてこの道をまっすぐに行くと地下鉄があるからそれに乗るとホテルの近くに行ける」と、友人に言ったらしい。中国は何かにつけて大雑把であるが、今日もずっとこんな調子であり、友人の言うとおりに素直に付いていくしかない。だいたい停留所の標識のないところに停まるのは、日本も今では余程田舎を走るバスしかないのではなからうか。我々3人はキャリアバッグを引きながら7～800メートル言われたままに歩くと地下鉄の看板が見えてきてホッとすする。地下鉄に乗り、幾つ目かの駅で下り地上に出る。歩いている人にホテルを聞くとすぐ分かった。到着して私はロビーの椅子に座ってゆったりしていると、友人がそばに来て「フロントが外国人は泊められない、と言っている」という。19日に同じメンバーで泊ったことであるし予約してあるわけで、何度も交渉するがフロントも「不好意思(すみません)」ばかりでダメな理由は言ってくれないそうだ。3月号で「成都城市理想酒店」が、2度と泊まりたくないホテルとなった、と書いたのはこのことである。何が理想だ! 看板に偽りあり、である。外国人差別ではないか!



どこを見ても竹、竹、竹



私の誕生日会
(7と1のローソクに火を点けた)

店を出てホテルに向かう途中、大連市にもある「好利来」という有名なパンやお菓子を売っている店があり、皆で中に入って行く。実は今日は私の71回目の誕生日なのである。友人は10人くらいが食べられそうな大きなケーキを買い、「7」と「1」のローソクを付けてもらった。小さなケーキでいいと言ったのにやはり中国人は見栄っ張りである。早速私の部屋に集合し、誕生日会が始まった。7と1のローソクに火を点け部屋

仕方なく友人が旅行社に電話して、近くのホテルを紹介してもらった。3人はまた外に出てキャリーバッグを引きずりながらあちこち探し歩いていると、八宝街という広い通りに面した「八宝大酒店」というホテルにやっと到着した。このホテルも断らなければいいかと思っていると、フロントは何事もなかったように手続きしてくれた。夜も8時を既にまわっていた。友人が言うには、今北京では10月24日まで第19回党大会を開いており、その関係で何か影響があったとしか考えられない、と言う。日本では考えられないことが中国ではよく起きるので気にはしないが・・・

さて、夕飯にしようと呼び出されると友人が若い女性をつかまえて火鍋の美味しい店を聞いている。女子大生であるその女性が言うには「蜀大侠」がお勧めと言って、親切にも店の前まで連れて行ってくれた。道々友人はその女性と話をしている。彼が言うには、彼女が近々大連に旅行するというので、微信でアドレスを交換したと言う。中国人は見知らぬ人でもすぐ友人となる特技がある。お店に入ると例によって“喧噪”がお出迎えだ。随分混んでいたが何とか席が確保でき、友人が注文すると顔が歪むくらい辛い火鍋が運ばれてきた。よくこんなものを毎日食べて胃がんにならないものだと感じるしかない。

のライトを消す。もう一人の友人がスマホで「ハッピーバースデー」の音楽をかけながら歌ってくれ、いやが上にも楽しい雰囲気になった。そして火を吹き消す。明かりが点いた部屋で改めて見ると、随分大きなケーキでとても3人では食べきれない。夜の12時頃であったが、私がフロントに行って訳を話し、ケーキを半分差し上げると2人いたフロントの女性は「生日快樂!」と言って喜んでくれた。見も知らない人にまでお祝いを言われるのも嬉しいものである。異国の地でのこのような誕生日会は初めてで、心から嬉しく思った。

6日目の24日は成都市内観光であった。「武侯祠」、「寛窄巷子」、「春熙路」、「錦里」などの観光地を巡ったが、以前の旅行記(176号～179号)に書いたので今回は割愛したい。成都市は歴史と近代化を兼ね備えた綺麗な街で、私の大好きな街である。寛窄巷子の通りにある郵便局で日本の友人に、うまく着いてくれと祈りつつ、絵葉書を出した。この日の夕食も火鍋であった。

楽しい時間はすぐ過ぎ去るもので、最終日の10月25日になった。大連に帰る友人は早朝の便なので来年の再会を約し、それぞれ帰途に就いた。私は、現地時間9時5分発のANA948便に搭乗したが、流石に午前中の便なので銘酒「一ノ蔵」は置いて無かった。
(終わり)